

# 書評 坂口周著 『意志薄弱の文学史——日本現代文学の起源』

河野龍也

坂口周さんの単著が出た。タイトルからしても壮大な構想の大著である。本書の書評については、刊行直後の二〇一六年秋に依頼を受けてはいたものの、妙な書きにくさを覚えて先延ばしにしているうちに一年が過ぎてしまった。それは著者である坂口さんを元同僚としてよく知っているだけに、改めて書評という形式で所感を届けるのが氣恥ずかしく思われたせいばかりではない。全く同世代の手になるこの著書の成果をどのように受け止めるかによって、自分の研究者としてのあり方が試されるような緊張感をもどこかで感じていたからである。また、本書の中心をなす論考のいくつかは、かつて本誌に掲げられた初稿から発展したという縁もあり、儀礼的な書評ではなく『實踐國文學』だから書けることを書きたいという勝手な思料に因

われて煩悶久しかったのである。それにしても、単発の論文で親しんでいた坂口さんの研究がこれほど大きなスケールに組み上げられて全貌を現したことにまず驚かされた。最近、文学研究のタイプにははつきりと二種類のものがあることを色々な実例によって知るようになった。一つは、特定の対象に向けて地中深くに杭を打ち込み頑丈な足場を築こうとするタイプと、もう一つはそのような足場から足場へと空中線を架設して華麗な綱渡りの技を披露するタイプとである。従来の研究成果を批判的に継承していく前者のタイプが提供するものは、確実な情報と論理の積み重ねであり、後者のタイプが提供するものは、斬新な発想による知的なエンターテイメントである。狭義の文学研究と言えれば前者で、必要になったときにそこで待っていて情報を与え

てくれるという安心感がある。一方後者には、一見無関係に見える対象を繋ぎ合わせる力技に特色があり、その強引さはしばしば「評論的」という言葉で従来の研究から攻撃されがちだが、そのアイデアは新鮮で刺激をもたらすのである。どちらの方法を取るかは研究者の資質というよりほかにかない。そして本書に現れている坂口さんは明確に後者のタイプに属している。だから論の手堅さを尺度にすれば、大胆不敵な着想とレトリックに喝采を送ることもできる。先に自分の研究者としてのあり方が試されると書いたのは、坂口さんの研究に向き合うことを通じて、結局この二つの方向に引き裂かれた自身の態度を意識させられるからなのである。

本題に入る前に、まずは本書の構成を紹介しておきたい。本書は序章に「曖昧未了」から「意志薄弱」まで、終章に「意志」をめぐる攻防」と題する論考を置き、全体を二部構成としている。明治・大正期の文学を扱う第一部の各章タイトルは、第一章「運動する写生——正岡子規と映画の論理」、第二章「催眠、あるいは脳貧血の系譜——夏目漱石から志賀直哉へ」、第三章「へ気づき」の神秘主義——内田百閒と夢小説」であり、昭和期の文学を扱う第二部の各章タイトルは、第四章「発声映画の時代——横光利

一の〈四次元小説〉論」、第五章「一九六三年の分脈——大江健三郎と川端康成」である。

副題がすでに語っている通り、坂口さんは柄谷行人の『日本近代文学の起源』の向こうを張るつもりで最近の論考を増補し一書に編み上げている。正岡子規の「写生」を起源に据え、日本の近代文学史を新たな「視覚」の編成史として捉える発想自体は柄谷とあまり変わりがない。だが、その「視覚性」の展開を、映画が作家たちに与えた世界認識の変容として記述するところに坂口さんの独創性がある。その利点は映画との対比において、小説における「時間」の問題を取り上げることができる点だろう。また、「夢」「無意識」「幻想」を描いた作家として、夏目漱石から志賀直哉、佐藤春夫、内田百閒に至る一つのラインを描き出し、「近代の自我」史観による定番化された文学史の盲点を突いている。論の目的とそこで扱われる対象の選び方は取り立てて新しいわけではないが、このような批判が大抵、在来の図式を単純に裏返した裏面史（傍流史）に陥りかねないところを、坂口さんは「意志」というキーワードを活用することで巧みに回避している。すなわち「意志的」な主体としての「私」の展開のみに注目してきた在来の文学史に、「意志薄弱」の文学系譜を対置させるといのが坂口さんの新しさである。このような見方を導入することで、日露戦争

以後急速に広がり、大正期に頂点を迎えた「神経衰弱」や、明治末の「千里眼事件」以後も衰えなかつた「催眠術」ブームといったこの時代特有の社会現象を文学史の記述にうまく取り込むことができた。これはひとえに「意志薄弱の文学」という「名づけ」の功績に帰せられるだろう。

坂口さんはまた、「親和性」という言葉を使って異なる事象を関連付け、新たな検討領域を鮮やかに開拓してみせる。それが最も成功しているのはやはり、「心」を解明する努力としての「心理学」や「文学」と、「心」を操るテクノロジーとしての「催眠術」との「親和性」に注目した部分である。そしてその成功は、文学テクストのみに限定されない、また日本語テクストのみに限定されない文献参照の幅広さによつて支えられている。つまり、研究対象を日本文学に特化した研究者とはかなり異なる教養のバックグラウンドを活かしている点、本書の大きな特色ともなっている点である。とりわけ「心」の問題について、現代主流となっている脳科学の成果を考慮しながら、大正期のこの分野に関する「学術的常識」のレベルを丁寧にも明らかにしている点が解説として貴重であり、また刺激的であつた。

だが一方で、横光利一の「純粋小説論」に提起された「四人称」を理解するのに、当時の映画論を根拠として数学的

な「四次元」の概念と結び付けたり、ポリフォニーの概念を用いてトーキー映画の登場という技術史的事象との同時代性を強調したりするところの論理が妥当であるのかは正直なところ判断に迷う。微視的に見れば異なる文脈の下に置かれていて、到底結び付きそうには思えない多様な言説を、「親和性」という魔術的な言葉で危うく繋いでいくレトリックが、かなり強引に見えてしまうのである。これは結局「純粋小説論」の分析に映画を用いることの妥当性という根本的な問題に帰着するわけだが、恐らく坂口さんはこの部分の論考を、映画史が文学に与えた影響力を明らかにするという命題から発想しているのであり、そのような前提のもとで読めばさほどの違和感はなくなるのかも知れない。

また、もう一点本書において気になつたのは、文学分野の先行研究に対する冷淡さである。例えば「無意識」や「潜在意識」などを文学のテーマとして引き出す際、「神経衰弱」の徴候ともいえる「朦朧」や「ぼんやり」「夢見心地」といった心理状態の描写が戦略的に多用されたという指摘は本書の最も面白い部分の一つだが、私の場合どうしても、識閥下への時代的関心を「朦朧」や「ぼんやり」という語によつて掬い取つた安藤宏『自意識の昭和文学——現象としての「私」』（一九九四・三、至文堂）が先例として思い浮かんで

しまい、多少の既視感が無きにしもあらずであった。坂口さんの場合はこれを主に大正文学の問題として論じている。先行研究を取り上げていけば論点の差異が明らかになり、「意志」という坂口さんの独自の問題設定をより明確に示せたはずなのにと惜しまれる。

以上のような問題点はしかし、批判として述べたところで本書の成果自体を傷つけることにはならない。坂口さんには、あえて強引なレトリックを使うことでしか見えてこない、その時代の巨視的な精神風景があるはずだといふなかば確信的な意図があるに違いなく、その勇敢さにこそ理ならぬ理があるわけだから、うっかりこれを批判したところで当人には痛くも痒くもないだろう。横光のように小さな偶然（飛躍）の積み重ねが大きな必然となるのを狙ったわけでもないだろうが、一部を見ると根拠が弱いように見える論理でも、書物の全体としてみるとあちこちの伏線が有機的に活かしている。まさに長篇小説の文法だという感じがする。

最後に、坂口さんの研究スタイルで羨ましいのは、何よりも自由だということである。作家論・作品論・テクスト論など、研究史の亡霊に囚われて自意識過剰になりがちな同世代の「日本近代文学」の研究者にはない健全さで、使える方法は何でも使う。分野を問わない多様な文献の参照、

一見無関係な事象をとにかく繋いでしまう大胆さ、原典そのものの文脈に足を掬われない自由な引用。要は、禁じ手を設けない闊達さが坂口さんの身上で、問題提起的などころだと思ふ。無遠慮な評言を連ねたが、これが坂口さんへの礼儀だと思ふ。坂口さんも古巣のよしみだと思つて、いつものニヒルな笑いで許してくれることだろう。

(二〇一六年一〇月、慶應義塾大学出版会、本体価格 三八〇〇円)

(この) たつや・実践女子大学准教授)